〈書　評〉

石川知彦監修／和宗総本山 四天王寺編集『聖徳太子と四天王寺』

光　川　康　雄

本書は「聖徳太子千四百年御聖忌記念出版」と銘うたれて刊行された。四天王寺の長い歴史を概観すると共に、個別のテーマについては専門的に掘り下げられている高著である。2021年には、聖徳太子関係の展覧会も多数開催され、全てを観覧することはコロナ災いもあり、困難をきわめた。それらの展覧会の図録類の中でも、もっとも学術的な価値が高い一書であろう。すなわち、カラー図版がふんだんに盛り込まれている点が本書の特徴の一つであろう。「序」の「四天王寺中心伽藍（南東から）」を皮切りに、「付録」の「四天王寺経供養」まで、約350点を数える鮮明な写真の数々に驚かされる。横長変形の紙型（25.7 cm×18.2 cm）が採用されて、それらが見開きで大変見やすくなっている。写真だけでなく、本文の執筆者や各論文も読み応え十分のものが並んでいる。29人の論攷を列挙しておこう。大きく5部構成になっていて、おおむね時代順に掲載されている。（なお、副題などは省略した。）

「序　四天王寺―太子と歩んだ1400年」　石川　知彦
「第1部　古代の四天王寺」　網　伸也
コラム1「四天王寺の発掘調査」　矢野　昌史
コラム2「出土瓦からみた飛鳥・奈良時代の四天王寺」　谷崎　仁美
コラム3「四天王寺亀井堂の亀形石槽」　佐藤　亜聖
コラム4「四天王寺金堂本尊の姿を求めて」　藤岡　穣
コラム5「四天王寺の舎利信仰」　内藤　栄
コラム6「四天王寺宝蔵とその宝物」　一本　崇之
コラム7「七星剣・丙子椒林剣について」　酒井　元樹
「第2部　平安時代の四天王寺」　大澤　研一
コラム1「『四天王寺縁起』と『大同縁起』」　南谷　恵敬
コラム2「四天王寺五重塔初層の祖師影壁画について」　石川　知彦
コラム3「四天王寺の阿弥陀三尊像（重文）について」　西木　政統
コラム4「山門・寺門と四天王寺」　寺島　典人
コラム5「四天王寺の聖教」　宇都宮啓吾
コラム6「四天王寺の日想観」　南谷　恵敬
コラム7「国宝『扇面法華経冊子』の史的位置」　増記　隆介
コラム8「四天王寺の両界曼荼羅」　竹下　多美
コラム9「四天王寺の神像」　寺島　典人
「第3部　中世の四天王寺」　大澤　研一
コラム1「四天王寺と熊野」　北川　央
コラム2「西国巡礼と四天王寺」　北川　央
コラム3「四天王寺の中世仏画」　南谷　恵敬
コラム4「四天王寺収蔵の銅鏡」　久保　智康
コラム5「中世の四天王寺仏師について」　石川　知彦
コラム6「中世の仏像」　齋藤龍一・一本崇之
コラム7「中世四天王寺の聖徳太子像について」　石川　知彦
コラム8「四天王寺の中世太子絵伝」　村松加奈子
コラム9「「四天王寺絵所」の謎」　村松加奈子
コラム10「四天王寺の講式」　阿部　泰郎
「第4部　近世の四天王寺」　大澤　研一
コラム1「出土軒瓦からみた中・近世期の伽藍修理」　芦田　淳一
コラム2「近世四天王寺の衆徒」　渡邊慶一郎
コラム3「四天王寺絵堂の聖徳太子絵伝」　一本　崇之
コラム4「鳳輦と玉輿」　久保　智康
コラム5「天王寺舞楽」　南谷　美保
コラム6「舞楽の装束」　河上　繁樹
コラム7「四天王寺の石造物」　角南聡一郎・佐藤亜聖
「第5部　近代～現代の四天王寺」　一本　崇之
コラム1「世界一の大梵鐘と大鐘楼」　一本　崇之
コラム2「四天王寺と近代大阪画壇」　明尾　圭造
コラム3「四天王寺中心伽藍の復興建築について」

植木　久
コラム4「四天王寺の聖霊会」　南谷　美保
「特論　幻の古代寺院・四天王寺の伽藍と建築」
櫻井　敏雄
付録
「四天王寺の法会と行事」　南谷　恵敬
「聖徳太子・四天王寺略年表」　渡邉慶一郎

目次の紹介が長くなったが、「四天王寺」研究の最高峰とよんでも過言ではないだろう。古く、1960年代末に講談社刊行された『秘寶』シリーズの「四天王寺」以来の大著ではないだろうか。これは、浅野長武ら編集の写真図版が中心であった。また、四天王寺の編集にかかるものでは、『聖徳太子鑽仰』（大阪、総本山四天王寺）という非売品の論文集が1979年に刊行されている。ただ同書には「四天王寺本願縁起と太子信仰」（金治勇）と「四天王寺」奥田慈應の2論文を除いて、四天王寺と聖徳太子との関係について論及されてはいない。そこで、研究史上でも、本書が果たす役割にはきわめて大きなものがある。研究者だけでなく、広く四天王寺と聖徳太子との深く長い結びつきについて、知っていただきたいと感じている。そのほか、現状の最新研究を反映。多士済々といえるうえ、時代も万遍なく網羅されている。近世から近代・現代にも詳しい内容を持つことは四天王寺の特徴を考えた時、大きな意味を理解した編集といえる。

考古学と美術史、芸能などに重点的に述べられている半面、文献史学や文化、仏教史・地域史などについてもう少し人材やテーマを加えていただきたいと思った。特に「聖徳太子」や聖徳太子信仰の専門家を1人でも追加されることが望まれる。執筆者が限定的ではないかと思った。大阪人にはなじみ深い四天王寺も、他の地方や東京などではどのような評価を受けているのか疑問を呈する次第である。時代的にも「古代」「平安時代」との2章にわける部分は、やや分量が多すぎて不統一のように感じた。さらに、「聖徳太子信仰」と四天王寺との結びつけるテーマが十分ではないように思われる。とはいえ、聖徳太子信仰の歴史は、日本仏教史の流れそのものであるように、「四天王寺」の歴史も日本仏教史の推移を表現していると言っても過言ではない。したがって、本書のもつ価値は本当に高いと考える。

一方で、四天王寺の研究について、評者は1980年代に「聖徳太子研究会」（四天王寺国際佛教大学主催）に会員として参加を許可していただいた。当時の奥田清明氏をはじめ、川岸宏教氏、藤島亥治郎氏、瀧藤尊教氏、金治勇氏、奥田慈応氏、出口常順氏、藤田清氏、白井成允氏、岡本精一氏など多くの関係者が研究を進められていた。さらに、坂本太郎氏をはじめ多くの古代史研究者らも招かれて盛大な大会が開かれていた。機関誌『聖徳太子研究』は超高値。図書館にも置かれていないため購入せざるを得ない状況であった。会員になり、ようやく入手できることとなったのである。それ以前からの『四天王寺』（四天王寺編集・発行）にも、田中重久（たなかしげひさ）氏や、小倉豊文氏、福島政雄氏らの論文を探した記憶がある。四天王寺研究は、それらの先学の研究をはたして受けついでいるといえるだろうか。聖徳太子ゆかりの寺院として、法隆寺研究に比較すると、やや寂しいものを感じる。また、地域で言っても、奈良県や京都府の寺院に比べ、大阪府や兵庫県などの寺院研究、とりわけ太子信仰との関係のある研究は、さらに充実してゆく必要がある。そのための第一歩として、本書のご購読とそれに続く四天王寺と聖徳太子との研究進展を大いに期待する。そして、それは私じしんの課題でもある。参考文献にもあがっている榊原史子女史をはじめ、山口哲史氏といった研究者の方々と切磋琢磨して、四天王寺と聖徳太子とをめぐる論争でも繰り広げていきたいものである。一面識もない多くの方々のお名前を引用してしまい申し訳ございませんでした。

個別の太子関係論文への紹介や疑問などについては今後の課題とさせていただきたいと思う。また、聖徳太子とのかかわりで法隆寺研究は研究書だけでなく、一般啓蒙書も数多くあるのに対して、四天王寺の紹介はやや遅れているように感じている。太子の墓辺寺の叡福寺や、大聖勝軍寺・野中寺など河内三寺院も同様であろう。また、兵庫県の鶴林寺（加古川市）や斑鳩寺（太子町）、法華寺（加西市）などの太子ゆかりの寺院と周辺各地。さらに滋賀県や東海地方、瀬戸内沿岸の各地まで。視野を広げることも聖徳太子信仰の研究のためには大切なのではないだろうか。本書の刊行を契機に四天王寺への関心が一層高まっていくことを期待して、結びに代えたい。

（びわこ学院大学短期大学部特任教授）

B5判変形、本文304頁、京都、法藏館、2021年11月刊；本体価格2,800円＋税；ISBN：978-4-8318-6070-5